

てあか 手垢をつけよう

昨年の12月に桜の木が切り倒され、ブランコや滑り台が引き倒されて姿を消しました。あれ以来9ヶ月がたちました。その間にちきゅう組が卒業して、新しい仲間を迎えました。9ヶ月もの間、遊ぶものもない狭い庭で、暗くて風通しの悪い部屋で、過ごしてもらいました。長い間不便を忍んでくれた子どもたちに心からありがとうございます。いよいよ新しい園舎・園庭に子どもたちの声があふれるときが来ました。みんなお待ちどうさまでした。新しい園舎、広い園庭を存分に楽しんでください。

9月に入ったばかりのある日、帰ろうと思って玄関を出たら、小学生が2人、話しながら目の前を通り過ぎました。「愛隣幼稚園がサー、ゼーンゼン変わっちゃったんだよナー」という声を残して2人は歩き去って行きました。もう暗くなりかかってもいましたから、それが卒業生なのかそうでないかはわかりませんでした。それから何日かして、お母さんに連れられてたんぼぼ組の子が新しい幼稚園を見に来ました。その子はお母さんと先生から「これが幼稚園だ」と説明されても、キョトンとしたままで、「幼稚園はどこ？」と訊き続けたそうです。

ご紹介した2つの話が筆者の心に印象深く残っています。通りかかった小学生には「愛隣幼稚園はチートモ変わらないよ！」と言ってあげたいです。園舎を建てるに当たっては、子どもが過ごしやすい生活の場にする、幼稚園中の子が自由に行き来できる、片づけなくてもよい場所を部屋の中作る、庭と部屋がつながっている、の4つを実現したいと考えました。それはこれまでの愛隣の子どもの生活を守ることであり、さらにダイナミックにすることを期待してのことでした。だから建物は新しくなったけれど、そこで繰り広げられる子どもたちの生活は少しも変わらないのです。

「幼稚園はどこ？」と尋ねずにはいられないという気持ちはとてもよくわかります。特にたんぼぼ組の子たちにとっては、4月から過ごし始めた、あの工事中の狭くて暗い幼稚園が「幼稚園」なのです。新しいところに引っ越した子どもが、引っ越してみても初めてそこに愛隣幼稚園がないことを知ってショックを受ける、それと似ているのかもしれない。「ボクが知っているあの幼稚園はどこにあるの？」というのは真剣な問いなのだと思います。そう考えるとたんぼぼ組の子たちにとっては、新園舎での生活開始は4月の入園と同じなのだと考えるべきなのでしょう。「ゴハサンデネガイマシテハ…」なのです。子どもたちが「ここがボクの幼稚園」と笑顔で言えるようになるには、少し時間をかけて上げねばならないかもしれません。

いろいろな戸惑いや、混乱を経て、やがてこの園舎と園庭が「ボクの幼稚園」になり「愛隣幼稚園」になっていきます。子どもたちの笑い声や泣き声が、壁や天井や床にしみこんでいきます。ケンカの騒ぎもみんなの歌声もしみこんでいきます。そうやって毎日少しずつ「ボクの幼稚園」になっていくのでしょうか。また、子どもたちはいかにも愛隣の子らしい使い方をはじめることでしょう。それは子どもたちが「手垢をつける」ことなのだと思います。子どもたちと先生たちの手垢がたっぷりついて、馴染んでいくと、ここが本当の愛隣幼稚園になっていきます。今まで以上に愛隣らしい愛隣幼稚園が生まれ出されていくことを心から楽しみにしています。